82-711
1200501326191
82
711

卅波戦史
4

国立国会図書館
×複写

始

ヨ6P66

82
711

丹波戰史

第四卷

波多野盛衰記

發行所 東京戰史館

丹波戰史波多野盛衰記第四卷

目次

澁谷雅樂助の問答……一
信長の挨拶……五
須知主水の口上……七
信長丹波武士の系統をきく……一三
畑將軍時能の末孫……一六
安井、小山、波々伯部の先祖……二一
籾井、小林、園田家の感狀……二四
内藤、位田、足立、尾林、別府の系統……二七
信長の不審……三〇
酒宴……三四
波多野再び村重を諫む……三六
荒木村重の回答……四〇
瓢簞より駒出ず……四四
青野城陷る……四七
城將園を破て遁る……五一
丹波軍尾林主膳に自殺を勸む……五七
白兵戰……六一
酒井重貞の末孫……六六
高橋綱包の子孫……七一
攝津軍の戰死者……七五
村上義光の末孫……七九
丹波軍尾林主膳の遺骸を送還す……八四

丹波戰史（波多野盛衰記）第四卷

東京 高田紅濤

明治 45. 3. 19 内交

(九四) 澁谷雅樂助の問答

中務の口上述べ了れば、澁谷雅樂助之に代りて只今中務の申上し如く、この度秀治宗貞將軍樣と和議を結び、御旗下となりたる上は、未來永刧上樣に忠節を勵み可申候、先般合躰の仰を蒙りたる節、御規定の箇條書の内に、波多野一家のみ單獨にて合躰致すに於ては、畿内より東へ向けての先鋒たるべく、毛利御征伐には決して加はる事相成らずとの事に候ひしも、其後摸樣變り、毛利も一同に合躰したる上は、中國に於て誰一人上樣へ盾衝く程の者もなく、山陰山陽十六箇國及に嶋らずして、芽出度治まるも、推參ながら波多野の力かと存し候

將軍樣天下の御成敗を急がせ給ひ、西國は毛利に御宗徒の大將を添へて、征討あらせられ、將軍樣は秀治宗貞並に別所を先鋒として、東國に向けて御旗を進められ、武田上杉北條を征伏して、一時も早く弓は袋に劍は鞘に收まりて、四海波靜かに、小田の蛙も太平を謠ふ、御代となし給ふべし

東國征伐の御手始めに、攝津國へ弓を入れられ候へば、波多野は眞つ先に馳せ向ひ、村重を退治して新忠に供ふる旁、源平以來取傳へたる丹波の武技を、上覽に入れたしと存し、旗頭共をも少々引連れて參りて候

就ては先達仰せ被下候、丹波並に從前領有し來りし本領を安堵し、丹後但馬旗下の義は先規の如く、村重退治の上は攝津一國を恩賞せらるゝ事、龜山城還附のこと此度一々御敎書を賜はりたし

龜山城の儀は、明智殿御退陣なき內は、籾井越中を始め東口押勢の者を、動かすこと叶ひ難く、自然攝津征伐の障りともなり申さん

雅樂助の口上未だ了らざるに、織田上野介信包(信長の弟)言葉を挾さみ

人質をば何とて延引せらるゝや

雅延引は少しも致さず、舊冬和議の仰を蒙るや、早速使者を藝州に遣はし、毛利に樣々と意見を加へ、漸くにして合躰を承諾せしめて還り、其上禮使並に人質のことに付て合議のため、新年早々中務及び不肖等再び藝州に參り、事を調へたる次第にて、其間とても再度書寫山に立寄り、羽柴殿の指圖を受け申せり、藝州と丹波とは道遠く隔り、彼れ是れと往復の間に多くの日子を費やし申せり

歸國の上萬事を差置きて合躰の御禮を申上げ、且つは急に攝州へ御發向の由承はり候に付、一番に村重退治の御下知を受け申さんと存じ、取急ぎて安土岐阜へ志ざし、一昨十八日國を發したるに、早御入洛御治定の旨にて、村井殿の指圖を受け、只今當地にて御俟受致し、御禮を申上ぐる處にて、延引には候はず

上人質を受取るまでは安心出來難し、御禮も何事も、其後に致さるゝが順序にて候

雅上野介殿の仰心得難く候、波多野一家の人質ならば、即刻にも差出すべきなれ共、今回は三家合同の和議故、從つて人質も三家の分を相揃へて、差出すが道理にて候

先刻も申上たる通り、藝丹道遠く、心は矢竹に逸れども思ふに任せず候、それに人質なる者は、弓矢の意知の上よりすれば、餘り重きを措く程のものにてはなく、却て君臣の義を正す方、遙かに重大なることにて、禮使參上の上にて、人質の御指圖を仰くが順序かと存候

秀治宗貞直接伺候し、合躰の御禮申上ぐる事に豫ねて評議を定め居りしに、將軍急に攝津へ御出陣の由傳へ聞き、村重退治に付ては豫ねて上意を拜し居るを以て、自身は御一令の下に出陣せらるゝやう、準備のため留まり、某等を名代として差遣はして候

斯く申せは波多野が人質を免るゝための、遁辭の如く聞ゆれ共、是は人質延引の理由を申上たる迄にて、三家の分揃ひ次第直に差出申さん

織田三七信孝

御両所の申條判明致し候、御希望の通り達し申さん、今度両波多野殿の忠節御感淺からず候、此上萬一毛利家に於て違背したる節は、波多野殿は如何致さるゝや

雅毛利家へは中務及某等參り、直接輝元以下吉川小早川に面會し、旗頭共一同立會の上にて、明確に約束を結び誓文を交換したれば、豈夫違背すべしとも思はれず、但し萬一違背したる節は、勿論波多野家先鋒を承まわり、速やかに此不義の佞人原を退治致すべく候

(九五) 信長の挨拶

やがて信長は使者を顧み

中務雅樂助以下一同早速上京の段、珍重大義の至りなり、今度秀治宗貞の心入を以て、三家一同合躰の次第、両使の口上にて詳細に聞届け、信長甚だ滿足に思ふ目下信長は未だ諸國に怨敵共多く、實は軍勢に苦しみ居たる處、多大なる助力を受け、此偉大なる勳功は、決して永く忘れざるべし

先般約束せし通り、丹波國其他本領旗下の諸國は、一切從前の如く秀治子孫に傳へ永く相違なかるべし、村重退治の上は、攝津を合せて守護せらるべくに付、速に

兵馬を差向けらるべく候

龜山城も所願の如く還附すべきも、光秀既に在城の事故、彼に他の領地を授けたる上、城を明渡すべく候、毛利の人質到着を俟つに及はず、丹波の分を速やかに安土へ入らるべし

此上は少しも猜疑を容るゝ所なし、秀治宗貞律義の心入重々の事なれば、人質にも及ばされ共、是も弓矢の禮義にて候

両使申條の如く、毛利別所を先鋒として九州を征伏すべく、丹波家は村重退治の上、武田上杉北條等の意嚮次第に依て、或は三家共討果すべくに付、其先陣と心得らるべし

中務仰の趣一々辱じけなく謹しみて御禮申上候、但し龜山城の義は、國中の士氣を鼓舞し、村重退治の兵威を補なふ爲なれば、是非共今回歸國土産として、下し給はり候へば、攝津を平定するに手間暇は取り申さず候

信長顔色和らきて呵々と打笑ひ、丹波衆は荒木を手の内の物の如く、一呑にせられ居るにや

村井長門守合槌を打ち、波多野と荒木は代々の怨敵故、荒木退治の分別は、丹波の國中平素の工夫と見ゐて候

中務雅樂助座に就けば、平林大膳、澁谷播磨、須知主水、酒井佐渡等順次禮を述ぶ、

(九六) 須知主水の口上

丹波旗頭の惣代として、江田大館の後見羽川刑部、額田市正、及び酒井佐渡、須知主水、茲に謹しんで合躰の御禮を申上候

両波多野家數年の間、怨敵の色を立申たるは、全く私の義にあらずして、弓矢の意知、義理のためなれば、此處は宜敷御諒察の上、往事は一場の夢、流るゝ水の泡、立昇る煙と共に消ゐて跡なき、御胸襟こそ望ましく候

明智瀧川殿は、弓矢の行懸り上、我等と顔を合すは妙ならずと思ひて乎、此席に列せられざるは遺憾にて候、昨日の敵も今日の味方となるは、戰國時代には敢へて珍らし

くもあらぬに、さりとは心狹き振舞かな、幸ひに將軍の命を以て、此席に招かれ、互に手を握つて、往を談し來を語るを得ば、一入の興味にて候

丹波の人質を安土へ入れ申す事は、秀治宗貞豫ねて覺悟致し居り、一族以下旗頭共へ夫々令を傳へたるに、西丹波の押へに居る小野木縫殿之助

前略小生實は貴著書中にある、小野木縫殿之助の末孫にて候が、小野木に關する事蹟にして、貴著書中に御掲載なき分も御座候へば、殘篇斷章にても承知致度渴望候に付、御多忙中誠に恐縮の至りに候へ共、何卒御教示被下度、伏して御依賴申上候

頓首大阪西區 幸町小野木欽三郎

谷大膳の兩人、己れの人質を直ちに羽柴殿へ差出さんと我意を張り、波多野が下知に應せず、是れ羽柴殿は將軍の御覺ゑ芽出度、波多野の武運最早末に近づきたりと見做し、數代の恩義を忘れ利に趨る仕方、波多野數代の間未だ曾て一人として、其下知に背きたる者なきに

斯樣の輩を其儘に打捨て置きては、波多野の威嚴にも關し、延いては今尙將軍の爲に

も宜しからず候へば、兩人より右の趣羽柴殿へ申入候とも、羽柴殿御取上なき樣御下知願上候

龜山城は明智瀧川殿數年奮戰の記念として、手放され難きは人情なれ共、元來丹波は他國に儔なき國風にて、源平以來代々志ざしを變へ、一致團結して國を守護し來りて候

某等は物の數ならねど、代々名を得し山名、仁木、大館、江田、久下、長澤等を始めとし、宗徒の者共數へ切れぬ程にて、互に劍を磨き合ひ、弓矢を競ふて候へば、今に至る迄一人として弓矢の意知を忘れたるはなく、下人土民までも義理を立て筋目を重んじ、一向利慾を知らず、兩波多野家の外に戴くべき主君はなく、此主君の爲には家も命も物の數かは、と思ひ込れて候、去れば縱令將軍の御威光を以て、直接國中へ御下知ある共、兩波多野を外にしては、誰一人御指揮を奉する者はある間敷、況んや明智殿が鯱鋒立せられ候とも……

推參ながら、數百年亂麻の天下を統一せられたる、不世出の英雄たる將軍の御下知な、

れ共、從來の丹波への御弓矢は備へが違ふて候、其故は將軍天下を掌握せんと志ざしたる日、一人の輕き使者を丹波へ遣はされ、唯一言賴むと懇懃に仰せらるれば、波多野は即日にも國勢を打拂ひ、御旗の下に馳せ付け、欣然として犬馬の勞に服すべかりしに候

人は感情の動物とやら、丸い卵も切りやうにて、四角ともなる世の中に、數代取傳へたる人の國へ、一言の挨拶もなく鋒を差向けられたる、明智殿の仕打は理不盡とや申さん、一寸の虫にも五分の魂あるものを、特別て意知張强き丹波男子爭で其儘控ゑ居るべき、遂に意外の遺恨を結びて候

さりながら雨降て地固まり、當つて碎ける丈夫の膽玉、自今弓矢の花實具はりたる御旗の下にて、志を立つる事を得ば、武運の冥加に叶ひたるにて候

信長一席始終を聞き了り、頗る感興を惹起したる面色にて

須知の申分道理至極にて末賴もしく候、貴所が事は兼て聞及びつるが、聞きしに勝る才覺人にて、流石宗貞が心許せる丈あり、願ひの廉々中務、雅樂助へも申せし如く、本領旗下は從前の通りなる事、攝津新補の事、龜山城還附の事、一々相違なき旨の墨附を取らすべく候

丹波の人質は一同に波多野下知して、安土へ差出さるべく、引離れて羽柴方へと望むは道理に背けり、依て此旨秀吉へ下知すべく候

惟任日向、瀧川左近に對面を望むとか、之は無用の事にて候、萬一先年來交戰の事に付申分もあらば、直接此信長に談せらるべし、龜山城を還附すれば仔細はあるまじ

今度の和議信長別して滿足に思ふ、今後丹波衆は無二の心入あるべく、信長亦聊かも隔心なし、此趣能く心得て旗頭衆へ申渡さるべく候

攝津退治の儀は兎角急がるべく、各々歸國の上は信長父子に先だち、取蒐る用意せらるべく、彼等が軍立は丹波衆熟知し居る故花軍たるべく、多大なる興味を以て一覽せん、去りながら味方の兵を損ずれば、延ひて信長の損害たれば、謀略を以て城外に誘き出し討取り候へ

流石天下を勘定する器丈ありて、其語る所何處となく垢抜して厭味なく、要領を得て一種謂ふべからざる懐柔力を有す

（九七）信長丹波武士の系統を聞く

其他種々の打解けたる談話ありたる末、丹波旗頭の系統に及び、信長侍史武井法印をして之を書記せしむ

信長澁谷播磨守宗忠に向ひ

美作守宗長の驍名は夙に耳にせるが、性行は如何に候ぞ

播美作守が青野民部を討取りしは、十六歳の時に候、青野が事は追て上聞に達し候はんが、攝津一國の勇士を招き、最後の勝負を決せんとて、名乗り揚けて躍り蒐るを、宗長心得たりと馬上にて組みながら、二人兩馬の間に撞つと落ち、遂に青野を組伏せて討取りて候

其後明智殿と黒井に於て對陣の際も、光秀殿の從弟明智左馬允光久を馬上にて斬り

其力量早業共に群を抜き、武略も亦父祖累代の相傳にて、老功の旗頭共も舌を捲く事毎度にて候

信勇者の子は種を繼ぎ、栴檀は二葉にして馨る、末頼もしき事哉

宗貞は代々波多野一流の家と聞及びつるに、美作が澁谷を名紹るは如何なる譯に候ぞ

播宗貞が先祖は秀治の先祖と一流の家にて、波多野相傳の家にて候、中興より嫡子に澁谷を名紹らしむる因由は、因幡中將秀綱中國の國司に任せられたる頃、美作國に澁谷右衛門舍重と申す豪傑あり、元は赤松廣澤の旗下にて候ひしに、已れの武勇並ぶ者なきに慢心し、放縦不羈諸國の浪士を集むること數百人、士卒數千人に及びて宛然たる梁山伯を顯出し、國民を苦しめ隣國を掠め、四國に渡りて阿波の十河を惱まし、雲州に入りて塩谷葦名を滅ぼし、國司の下知を事ともせず、傍若無人に振舞ひて候

去る程に澁谷追討の勅諚並に敎書國司に下り、美作の廣澤備前の赤松播州の別所

其他大内山名毛利及び塩谷葦名の殘黨等の聯合軍を起し、四方八方より澁谷の城を取捲き犇々と攻むれ共、敵は無類の要害に據り巧に防戰して、寄手如何ともすべき術なし

此時波多野秀綱が次子に、左京太夫秀高と申す青年あり、自ら奮ふて此難攻不落の金城鐵壁を破らんと請ひ、智謀を以て一擧して城を陷いれ、澁谷以下の醜類を屠る是より秀高の武名中國に鳴る、朝廷其功を賞し、作州少將に任せられて候

此後波多野兄弟は家を分ち、長子秀行は秀綱の後を繼ぐ、之を八上波多野家の祖となす、秀高を氷上波多野家の祖となす、此頃中國の習慣として、大敵を滅ぼしたる時は、其敵の姓を子孫に傳ふるものから、人皆秀高を呼ぶに澁谷殿を以てし、宗貞も幼時は澁谷と唱へて候

秀高は宗貞の祖父にして、中興山名家と一躰になりたる事あり、秀高の武威中國に輝やきてより、中國九州の武士之に屬するもの多く、宗高此慓悍なる武士を從へて氷上に入りてより、丹波の天地に熱烈なる活氣横溢したるにて候、

紅濤曰く　波多野時代に丹波の天地に於て、弓矢の精華を煥發して天下の偉觀を呈露したるもの、其原因遠くして一に血統の上に在り、蓋し丹渡の地勢たる、十重二十重の屏風を引繞らしたるが如く、四圍の群山連峰は無比の天險要害たる上往古は内裡の主基御領に屬したるより、激烈なる戰波鬪紋も、此山を越ゑ此堤を破る能はず、一種の局外中立港を築きしなり

源平の亂建武の役に、剛健なる東國の落武者共、此好個の中立港を目指して避難せしに始まり、元龜天正年間に到つて、波多野宗高慓悍なる九州の隼人を率ひて丹波に入り、茲に剛健なる東國武士の血と、慓悍なる九州隼人の血と化合して、一種の熱烈なる靈火を發し、遂に丹波戰爭を起すに到れり

而して此血液は天正の大戰に殆んど流盡されたるは、丹波國に取て千秋の恨事たらずんばあらず、此血枯れて丹波眠る、然り此血一たびは枯れたり、去れど愁ふる勿れ、此血盡きたるに非ず、微かながらも丹波人の血管には、今も猶此血液傳はり居るなり、丹波人たる者夫れ自省自重せよ

信是迄村井長門菅谷九右衛門より、波多野の噂を聞込み、宗貞が兵の練れ居るには、何か仔細なくて叶はずと考へ居たるが、扨ては去る由緒ある家筋にて候か、斯る筋ある大將を、丹波の山奥に埋むるは最と惜き事なり、早く天下の場所に出して、手廣く弓矢を取らせ、渉の行くを見たきものなり、今度の和談に付ても宗貞覺悟の善さに、何事も殘る隈なき首尾となり、實に花も實もある大將哉、氏筋と云ひ、武邊と云ひ、今度の働きと云ひ、信長決して疎略には思ふ間敷候

信長亦須知主水酒井重貞に對つて、丹波旗頭の素性を尋ぬ、二人交互に一々家の系統を物語れば、信長感嘆して、扨も〳〵物筋の寄合かな、昔より丹波侍と物々しく傳ふる事尤なれ、數代の間家を取失はぬも殊勝なり、國拆武邊の嗜も道理にて興ある事哉、いざ茲に列席の旗頭衆も、各々其素性を物語られ候へ

(九七) 畑將軍時能の末孫

畑彈正守廣が曰く、某が家は新田左中將義貞が宗徒、畑六郎右衛門時能が末孫にて

候、建武三年九月、尊氏佯はつて官軍に降り、天皇に闕に還御し給はん事を請ひ奉る、天皇信じて之を聽さる、義貞未だ之を知らず、超ゑて十月左衛門督藤原實世卿人を義貞の陣に遣されて申され候には、尊氏欵を納れて天子其營に親臨し給ふ、公之を存じ給ふ乎

義貞之を信せずして、是れ畏らく使者の誤聞ならんと申して候、傍らより美濃守堀口貞滿申すには、今朝江田行義大舘氏明故なくして、叡山の中堂に參りて候、某も大に怪しみ居れば是より參りて窺ひ申さんと、馬を飛ばして行在所に參りて候へば、陛下は今や御輿に召さるゝ所にて候

貞滿一禮して進み、御輿の轅を押へ泣て申すには、臣道路の說を聞き半信半疑にて候ひしに、今は全く事實にて候、抑も義貞何の罪科候て陛下義貞を捨て尊氏を庇ひ給ふや、元弘の初めに當て義貞敕を奉して高時を殪し、叡慮を安んし奉りて候、尊氏謀叛を起して以來、一族王に勤め義に死する者八千餘人、而して賊の勢益々熾んにして官軍利を失ふもの啻義貞が戰ひの罪のみに候はず、天運未だ廻らざるにて候

陛下必ず今日の擧を遂げ給はんとならば、義貞以下一族五十餘人を召し、死を御前に給ひ然る後發し給はれ

やがて義貞弟義助義顯と三千人を率ひて叅れば、天皇義貞兄弟を招き給ひ、尊氏叛逆を企て以來、卿は其同宗たるにも拘らず、身を挺して順に歸し始終渝らず、朕深く之を嘉みす、卿の宗族に仗て四海を鎭平せんと欲すれ共、如何せん天運未だ會せずして、兵疲れ勢蹙まる、故に假りに和議を講じ時を俟つのみ、此事は元卿に謀るべきなれ共、謀漏るゝを慮ばかり、發するに臨みて告げんとせしなり

聞く越前地方には歸順する者多しとか、卿宜しく彼地に叅り北陸を經略し候へ

朕京師に還らば卿が賊名を得るを恐る、仍て卿に附するに太子を以てす、卿之を見る猶ほ朕が如くせよ、軍國の事は一に卿が裁量に任せん、朕已に卿の爲めに恥を忍ぶ、卿亦朕の爲めに奮勵せよと、畏れ多くも後醍醐天皇は涙を垂れ給ふ、將士皆泣て龍顏を仰く能はず、翌日義貞皇太子を奉して北陸に赴き、一族宗徒の者皆之に從ひて候

獨り大舘氏明、江田行義、宇都宮公綱、本間資氏等帝に從ひ奉りて京師に入れば、

尊氏果して帝及び從者を囚へ、資氏を殺害して候

翌年夏氏明は伊豫に逃れ、江田修理亮行義は、大舘左京太夫氏義(氏明の子?)大島民部等と、丹波の中村(天田郡)に逃れて候、此時畑六郎左衞門の子六郎次郎守治も、大舘に從ふて丹波に入りてより代々丹波に居住致して候、

畑の子孫は多紀郡畑村に於て城主となり、其子孫今に存在する者多し、余の恩師故鉄道作業局汽車部長畑精吉郎氏も、其一人なりと語られたる事あり、江田の子孫は何鹿郡綾部の城主となりて、波多野時代まで連續したれば、南朝の忠臣江田行義の墓は、中村或は綾部の内に存在せざるべからず

畑氏の血統は時能の子を能速と云ひ(守治の名見ねす)能速二子あり能道守道と云ふ、能道二子あり道永守永と云ふ、道永の子守重、守重の子能重、能重の子經重、經重の子守綱牛太郎と稱す、守綱二子あり忠綱守廣是なり、忠綱の二子能綱守能、守能牛之丞と稱し叔父彈正守廣の家を繼ぐ、守廣は八上落城の後矢織の城に據り、一族郎黨二百七十三人を聚め、波多野の弔合戰を起して戰死す、時に年八十一、守能は攝丹の

境なる母子の永澤寺に入り、髪を削りて病牛法師と號し、是れより紀州高野山に登り麓なる香江に庵を結び、戰友の菩提を弔ふ後攝州丹生山に移り、終る所を知らず、長子守國牛兵衛と稱し、三十五歳にして氷上郡黒井八幡山に戰死す、二子能國牛右衛門二十八歳、三子能忠牛之允十五歳（天正八年）あり、今多紀郡にある畑氏は此子孫ならん

波多野輝秀の感狀

今度輝秀に對し、忠節を抽んぜられ候は、誠に神妙の至りなり、仍而曾我庄両地の事、一識申談候、全領知相違有るべからざる之狀件の如し（原文は漢文）

大永元辛巳九月　日　　輝秀書判

畑牛太郎どのへ

曾我の庄は現時の多紀郡畑村なり

波多野孫四郎元秀の書翰

船井郡九品寺分、同曾我谷の内奥分、分力して之を進ずべく候、萬一相嫌ふ事有之に於ては、地を替へ進ずべく、彌御馳走專一に候、猶歳左近をして可申候

恐々謹言（原文は漢文）

弘治二年十月二十二日　　孫四郎元秀　書判

畑七郎左衛門尉殿

(九八) 安井小山波々伯部の先祖

安井源左衛門が曰く、某が先祖は伯耆波多野家の流れにて、安井三郎有忠が末孫にて候、伯州より秀治に從ふて丹波に叅りて候、別に卷物を傳へて候

小山小四郎が曰く、某が先祖は、賴朝公の家臣小山判官朝政が末孫にて、建久年間朝政が末子、小山小太郎朝國と申すもの、京師に居り、故ありて丹波に赴き、遺腹の子あり小山小次郎朝綱と申して候、是れより代々家を傳へて居所を小山と唱へて候、家に卷物を傳へて候

波々伯部四郎次郎が曰く、某が家は内裡の御料預りの家にて、波々伯部（多紀郡）の

庄司藏人が末孫にて、昔は七頭の一に居り、今に嫡流は七組の家筋に候、某は庶流にて尊氏將軍に忠節を盡したる、波々伯部次郎左衛門光則が末流にて源氏にて候、先祖は官位昇進したるものもありて、代々次郎左衛門と申して候

足利尊氏の感狀

尊氏書判

波々伯部次郎左衛門尉爲光に下す

早く伯耆の國稻光保の地頭職たらしひべき事

右人勳功之賞として、宛て行ふ所のもの也、先例を守り沙汰すべの狀件の如し

（原文は漢文）

建武二年十月十九日　　高國書判

細川高國の感狀　其一

（永正五戊辰年六月廿四日於酒井）

去る二十四日酒井に於て、合戰の時粉骨の由、波多野總四郎より注進到來候、神妙に候、彌〻戰功を抽んずべく候也

六月二十六日　　高國書判

波々伯部大和守どのへ

同　民部烝どのへ

高國は足利の管領細川政元の養子なり

細川高國の感狀　其二

去る十日丹州福住貴寺に於て、合戰の時忠節の由、注進到來尤も神妙なり、彌〻戰功を抽んずる事肝要に候、猶波多野總四郎申すべく候謹言

七月十五日　　高國書判

波々伯部大和守どのへ

細川元常の書翰

今度淡州より御座を移され候、則ち御入路之れあるの條、此時別して軍忠を抽んぜらるべき事肝要に候、猶又五郎申上べく候謹言

四月十三日　　元常書判

波々伯部民部烝殿

是は足利義植丹波に遁るゝ時の事にして、元常は細川藤孝の養父、又五郎は波多野なり、波々伯部は多紀郡の素封家波部氏の先祖なり

（九九）籾井小林園田家の感狀

左記の數通は信長との物語には關係なきも便宜上茲に掲くることゝせり

細川元常の籾井家へ送れる書翰

御入路近々に候條其意を得成され、此砌忠節肝要に候、然らば尤も御恩賞の儀は、隨分申達すべく候、猶波多野又五郎可申上候敬具

卯月二十八日　　元常書判

八田北一族中

細川持春の籾井家へ送れる書翰

高國御退治の儀、公方樣淡州より近日御座を移され候、連々阿州へ對し御面合せられ、自娘御戀望の仔細有之條斯の如く候、然る處時日を移さず御入路候、此節御馳走を以て各〻戰功を抽んじ候は、尤も肝要たるべく候、自然御申沙汰は無調法至極に候へ共（此間四字不明）入魂致すべく候、猶御館舍に依て重ねて申談候恐々謹言

三月十五日　　持春書判

籾井御一族御中

將軍義植丹波へ奔竄中、持春の娘を妾として籾井の館へ預ける依賴狀ならん乎、色男御安くなき艶種を遺しけり

波多野輝秀の感狀（篠山河原町澤田屋（小林）治兵衛家藏）

今度輝秀に對し忠節を抽ぜられ候、依て日置庄東分澤田里、其方先祖舊領たる故並職申談候、彌領知相違あるべからざるの條件の如し（原文は漢文）

大永元辛巳六月　日　　輝秀書判

小林(名を逸す)殿
細川高國の感狀　(同人家藏)

去る十六日大江山南部に於て合戰の節、小原勢と打合栗山才藏を打取り、軍功の程尤も淺からざるを以て、料足百貫文當座の褒美として、下し候條件の如し

九月十八日　高國　書判

小林次郎兵衛尉殿

光隆の感狀　神田庄大山(園田)又左衛門家藏

今度味間表合戰に於て、各加勢比類なき働き、高石免節子孫に至るまで申傳ふべく候、猶青野十兵衛へ申すべく候謹言

天文十八年八月三日　光隆　書判

園田一族中

是れ多紀郡の素封家園田氏の先祖なり、園田氏の富因遠しと云ふべし、舊套墨守無事安全主義を信ずる丹波人士諸君記憶せよ、園田氏や波部氏今日の順境は、皆祖先が萬死の途に出入し、奮勵努力したる結果たるを、何れの時代を問はず勇往邁進は、處世上最も安全の策たるなり

(一〇〇) 内藤位田足立尾林別府の系統

内藤小十郎が曰く、某が家は下司の家にて七組の筋に候、尊氏將軍某が先祖内藤三郎左衛門道勝が曾路の館に隱れ、武運を開きてより、其恩賞として七頭の列に入り、備後守に任ぜられて候、其後義輝將軍に仕へたる、内藤備中守は某が祖父に當り平氏にて候

位田五郎左衛門が曰く、某が先祖は内侍領の掌人、位田の庄司祝部權守次郎と申し、丹波の供御田を預かり傳へたる七組の家にて候、位田とは御位の神田と云ふ意義にて候、先祖には位階の隆き者も多く候、尊氏將軍に忠節を勵みたる、位田次郎晴長の末孫にて平氏にて候

足立源三郎光繁が曰く、某が先祖は惡源太義平に事へたる、足立右馬允遠光と申し

て候、其後胤三郎光義は屢次尊氏將軍に戰功を立て、嫡流は七組の列に居り、某は庶流にて候

尾林大膳基康が曰く、某が先祖は源頼光五世の後胤、瀧口右馬允康政より出で、中頃は楠左衛門尉正行にも、血統連なりて候、攝津の池田黨は一族なれ共、弓矢の意見合はずして、池田、荒木とは怨敵にて候、攝津の源氏にて候

別府五郎左衛門行光が曰く、某が家は西國にて名を知られたる、別規助が末流別府小太郎行氏が後裔にて、家に卷物を確かに傳へて候、中興より中國にて宗貞が先祖に事へ、波多野家に從ひて丹波に移りて候　此時信長容を動かし

偖も〳〵物筋の揃ひたる事哉、過ぎつる日築田左衛門に命じて、別規を名紹らしめたるが、別規の正當の血統が丹波に在りとすれば、夫れにも及ばぬ事に候とて、築田を召し別府に紹介たる後、面々心して信長に軍忠を勵み、先祖の家名を起す樣心懸くべし、丹波の山家にて埋木となるは、口惜くはなき乎、無念にてはなき乎

と精神を罩め力を入れて諭せば、鐵腸石心の丹波旗頭も、感慨無量打ち首垂れて、少

時が間は石像の坐せるが如し

信長は更らに語を繼ぎ、其他の衆も申述べよとありければ、名和又左衛門貞俊は、先祖南朝の忠臣伯耆守長俊より、相傳の巨細及び波多野に事へたる由來、石堂は先祖石堂左衛門よりの續柄を、荒川は其祖荒川三郎以來源氏の系統を、平林大膳、波邊大學等皆其筋目を詳細に物語れば、坐中の面々孰れも驚異の眼を瞪り、從來丹波侍と一概に輕蔑み來りたるの非を、大に悟りたるものゝ如く

偖も〳〵歴々の侍共かな、道理で弓矢も強く、誠實の籠りたる日頃の行ひよ、丹波者と云へば土民に毛の生へたる位に思ひ居たりしに、揃ひも揃ふて思慮分別と云ひ、取廻しの都雅なること、日本全國は愚か唐天竺へ出しても、よも拙劣は取らじ、羞かしからぬ立派なる侍にて候、平素に人選を謹しみ、武士の作法を嗜なみありと見ゆ、假りにも源平以來の侍などと、廣言吐かるゝも理にこそ、氣美〳〵

として潔き武士かな

(一〇二) 信長の不審

譽詞は彼方此方より潮の如く湧き起れり、春風駘蕩として櫻花爛漫、和氣靄々たる天地にも、信長が冷靜なる眼の裡に、猜疑の雲翳は絶えず去來しつゝあるなり

此度名代の面々大軍の備へにて參られ、莊嚴なる儀式の内にも、警戒の色仄見ゆるは如何に候ぞ

須知主水は茲ぞ大事の場合と、言葉を懇懃にして

此度両波多野が働きを以て、毛利別所をも説得し、一同芽出度和議を取結たる事、將軍へ對しては大忠となり、三家に取ては家を永遠に樹つる基礎を築づき得て、衷心の愉快抑へ難く、公にては將軍の武威を世上に發揚する事となり、私にしては波多野が弓矢の面目を、世上に衒ふためにて、此無邪氣なる所こそ、波多野の眞面目を發揮したるにて候、秀治宗貞直接參向致すに於ては、中々此分にては濟されず候、是れ弓矢の禮儀を後世に傳ふる爲めにて候

今茲に君臣の義を結びたる上は、主君が一令の下る所、炎々たる猛火も蹈むべく、滔々たる激流も渡るべく、晃々たる白刃も冒すに於て、些の躊躇なきは勿論にて候

丹波の弓矢の習ひとして、武士が一旦賴むとの一言を受くるが最後、運に任せて生命を的に進み、退く事を知らぬ俠氣を以て、弓矢の意知と心得、世に誇りとする所に候

今や天下騷がしく、四海の武士踵を翹げて、亂を思ふ時節に候へば、何日何時將軍の、御用命下らずとも限られず、いざ鎌倉とならば、今にも此軍勢を引連れて、唐天竺までも押渡り、軍忠を抽んずべく、決して明日までの、御猶豫などゝは申さず候

此度將軍御入洛の目的は、村重退治のためと聞ゐて候へば、御先約に依り、定めし何等かの御下知の下る事と心得て候

攝津國は代々丹波と、犬猿の間柄なるに、波多野が將軍に合躰せしと聞かば、攝津御征討の先鋒は、必ず波多野たるべきを覺悟し、益々敵意を募らし候はん

江戸の鰤は長崎にて討れ、庭に糞を垂れたる犬は、出逢頭に棒を喰はされ、我等此度の入洛に就ては、是非共途を攝津に籍らねばならず候

著者は事物循環の理法に就き、多大なる興味を以て研究しつゝあり、此當時八上より京都に出づるには、能勢或は池田に扳けるを以て、順路となしたるが如し、而して今日交通運輸の徑路が、三百年前の狀態に復歸したるを察し、更に想ひを支那革命の上に馳せ、東洋の風雲益々急なると共に、歷史の研究一日も緩ふすべからざるを悟る

去れば村重にして氣骨あらば、必ず途に要擊すべきを覺悟し、其用意を調へて參つたるに、彼は將軍の權威に恐怖やしつらん、或は波多野が武に敵し難きを諦めやしつらん、一矢だに送るを得爲さで、臥榻の下空しく敵の蹂躙に委しぬ

しかのみならず、使者入洛に先だち、所緣を以て荒木久左衛門、尾林越後等が許へ遣はし、此度波多野は毛利別所を語らひ、將軍へ合躰したるに依て、禮使として中務雅樂助等、安土岐阜に赴くべし、荒木殿は將軍家重恩の御家人にて、不義の弓を

彎き給ふ事、天道佛神の容され難き所、過ちて改むるに憚かる勿れの語に從ひ、將軍の軍門に降らるべし、さあるに於ては丹波合戰の功勞に事寄せ、荒木殿が罪をば、波多野誓つて申受候はん代々の怨敵なれ共、弓矢と隣交とは其間に區別あり、丹波の弓矢の意知は、情在て酷からず、御隔心あらせ給ふなかれ、若し亦前志飜へし給はぬとならば、今日より波多野は將軍の旗下に屬し、貴國に途を取りて、將軍へ禮使を送るべければ、仇の片割よも無事に通し給はさらん、小勢には候へ共一矢仕らん、御返事如何にと申し送りつるに、今に一言の挨拶も、梨の礫となりて候

熱血を濺ぎ流水の辨に委せて、滔々と說き明せば、道がの信長も魅せられて、喜色滿面に溢れ、相格崩して拍手喝采し

委細は述べらるゝに及ばず、偖も〳〵奇略縱橫なる哉、胸中爽快を覺ゆ、荒木奴丹波衆には手懲したりと見ゆ、此上の醉興に面々の歸途、通りすがりの城へ、掠撮一番荒木の不意を衝き、晝寢の夢を驚かしては如何、但し本氣の沙汰にてはなく、惡戲半分なれば、一矢輕く打込むに止め、一人たりとも味方を傷つけぬ樣心せよ

神ならぬ身の、明日は我身の上とは露知らず、此奇想天外より落つるが如き、信長の發案も、神慮の一端と思へば、因果應報の理も、中々いみじかりける事にこそ

(一〇三) 酒宴

廣澤中務は、直ちに御請致し

上意畏まりて候、　當り中て肝を冷させ申さん、願くば御撿使を仰付られ候へ、丹波家の弓矢の風を、聊か御目に懸たくこそ候へ

尤なり心得て候、必ず彼等が思ひ寄ぬ所を狙ひ、一矢脅かし候へ

話頭一轉して、丹波旗頭の旗號に及び、信長一々手に取りて熟覽し、荒木山城守氏綱が、阿彌陀佛の旗を見て、最と興ありげに、且つ讀み且つ笑ふ

旋て酒宴は開かれぬ、酒は池の如く湛へられ、肉は林の如く盛られ、金銀を鏤ばめた る膳は、燦然として先づ眼を射る、流石に天下の將軍の響應よと、衆皆下りたる盃も て合圖す

接待掛としては、蜂屋兵庫頭頼隆、蒲生忠三郎氏郷、堀久太郎秀政、牧村七郎兵衛、其他多人數出で、五々三の儀式にて、盃を給はりたる次第は、信長公の盃を、一人二人づゝ出でゝ頂戴す、廣澤中務の受けたる盃は、織田上野介にて納る、澁谷雅樂介の受けたる盃は、織田源五郎に納り、其他の者の受けたる盃は、皆信長の連枝一族の衆に納まる、此盃の中には、將軍の威光を吹込あれば、其儀式の莊嚴なる事、謂ふも中くに愚なり

取次の衆は、村井長門、飯尾隱岐、長谷川丹波等にて、鳥帽子大紋の裝束なり、更に又表座敷にて儀式あり、織田上野介信包、三七信孝、七兵衛信澄、源五郎、飯尾隱岐村井長門、筒井順慶、前田又左衛門利家等、席に列なる、上野介盃を廣澤中務に献し、中務其盃を三七に献す、三七其盃を谷田右近に献す、右近之を飯尾隱岐に廻す

次の盃は澁谷雅樂助より始めて、三七に献す、三七之を澁谷播磨に廻す、播磨之を上野介に廻す、上野介之を平林大膳に廻す、大膳之を村井長門に献して納む、是より盃は彼方此方に飛交ふて、互に千秋萬歳を歡呼し、一座水をも漏さず打解けぬ、信長卷

は孰れも、風儀善き侍にて、流石に將軍は善き人持よと、丹波方は賞賛すると共に、信長方は又我を折て、丹波侍を譽め扱けりとぞ聞えし

渡る世に惡魔は住まじ鬼も蛇も巳が心の曇りに宿る
世の中は情の柱兼ね合ひて共に立てよと人の字は云ふ

(一〇三) 波多野再び村重を諫む

偖て村重惡戯攻に就て、信長より撿使として、蜂屋兵庫頭、福富平左衛門、島田所之助を遣はす、使者よりは此趣を、天王、虎杖（俗語エッタンドリ）、山田の諸城砦及び、八上、氷上の館への注進は櫛の齒を引くが如し

此度合躰御禮の首尾は、一点の申分なく、氷上家の大事を相傳したる、中務、雅樂助、主水、播磨等の老練家の腕揃なれば、席上に於て、色々の暗礁もありたれ共、無事に漕ぎ拔け、猜疑心深き信長の、腸を洗ふて清淨無垢、肝膽相照らすに到らしめたる、手腕は大に高しとせさる可らず、此三家合躰の噂は、忽ちパッと世上に傳はり、諸

國の均勢上に、尠からざる動搖を起したりと聞ゆ

斯くて廣橋、中院の兩傳奏へも、秀治、宗貞より内意の使者を進め豫ねて辱なくも、敕諚を給はり居り候、將軍との合躰此度首尾克く調ひて候、秀治、宗貞信長と對面の上は、直ちに參内御禮言上致すべく候へ共、不取敢各位まで御禮申上候

惡戯合戰に先だち、碓井宮内、位田五郎左衛門、仁木權太夫の三人に、國與力衆を添へ、徒者三百餘人にて、尼ヶ崎の妙滿寺に至り、住職某の手を通じて、村重に旨を告げしむ、此寺院は國與力渡々呂木六左衛門が、壇家の關係あればなり

丹波兩波多野家名代の、廣澤中務綱忠、澁谷雅樂助秀辰申入候、丹波家此度征夷大將軍と、合躰したるに付某等名代として、弓矢の禮義を正し、之より御領土を踐みて歸途に着く所に候

先般愚見を披瀝致して以來、鶴首して御回答を俟ち居り候ひつるに、今に何の御沙汰候はず、是れ果して武士の禮儀に、叶ひたるものにて候哉

荒木殿が將軍へ對し、解け難き遺恨を結ばるゝには、何か深き仔細なくては叶はず候へ共、大局より思考を廻らせばそは非が事と存候

攝津は荒木殿重代の國に非ず、國の旗頭衆亦荒木家譜代の、恩義を蒙りたるに非ず、國の要害は堅固とは申し難く、其上高山右近、中川清秀等は信長の懐中に入り、國中の人心一和せず、此行末は御自滅の外あらずと覺ゆ候

殊に荒木殿は將軍の洪恩に浴し、身を起し今日に到られたるに、反旗を飜へし給ふ事、不倫にて候はず哉、波多野、毛利、別所は、祖先傳來の國にて、信長は昨日までの怨敵なれ共、既に征夷大將軍に任せられ候上は、弓矢の禮を重んじ、一躰の約を立てゝ候

然るに今度將軍より、丹波家へ新恩として、攝津の守護を賜りて候、若し波多野に丹波の弓矢は夙に熟知せらる如く、國風として卑劣なる志、汚れたる利慾の貪りは、斷して致さず候、只一點清き弓矢の正法に、心眼を注ぐのみにて候

荒木殿とは數代怨敵の、筋目も候へ共、丹波の弓矢は義の前には、何事も忘るゝが常にて候、今貴家の勢ひ滅亡の淵に、近づき給ふを坐視するに忍びず、切に切に御諫言申上候、是非に波多野の周旋を以て、將軍へ降り給へ、丹波家今度合躰の功勞に代へて、必ず荒木殿が領土保全を、引請申さん、冀くば波多野が、衷心を諒ぜられよ

斯く迄波多野が赤誠を置たる、友情を酌み給はず、必ず將軍へ男子の　念を、徹さんとの御決心なれば、最早詮なし遺憾ながら、波多野は將軍の先鋒となり、弓箭を以て雌雄を爭ひ申さん

某等歸國の節御領土を、素直に通さるゝに於ては、弓矢の越度たるべければ、御存分に軍勢を差向らるべし、將軍へ合躰の禮に、一軍仕らん、若し荒木殿より御手出なくば、當方より一矢失敬仕らん、之亦弓矢の作法にて、已むを得ず候、右兩樣の内手短かに、御快答を俟入候

(一〇四) 荒木村重の回答

恨に酬ゆるに恩を以てし、温情至誠共に人を泣かしむ、木石に非ざる限りは、誰か亦感動せざる者あらん哉、住職委細了承して、荒木に通じてければ、村重は直ちに荒木久兵衛、乾助左衛門を、妙滿寺に遣はし、挨拶を述べしむ

丹波家數年の怨敵たる、某に對し遺恨を忘れ、段々の難有御忠告、道がは代々弓矢の御嗜みの程も窺はれ、村重骨髄に沁みて感涙を催して候、早速御志を空ふせず、波多野殿の御顏を立て申度は、山々にて候へ共如何せん、某が國侍共同意致さず、其上信長は底意知の酷き人にて、今こそ威勢並ぶ者なく候へ共、迚も永く天下を治むる器量に非ず、推參ながら心狹く人物小さし、天道爭で其無情を容さん、見給へ天罰に依て斃るゝの日は、旋て遠きに非ずと覺ゆ候

村重は信長取立の者に非ず、實は代々の領地にて候、信長よりは曾て一庄一箇所も、添へて賜りたる事もなければ、別に恩義を感ずる事は候はず

信忠の世にさへなれば、亦何と乎せん術もあらんと、兼てより一樓の望を繫ぎ、暮し居候へ共、蛸蚪は魚に似て居ながら、次第〳〵に蛙に化るを見るに付て、最早此世に望の綱も絶へ果て候

丹波は要害無類の國にして、古代よりの大將衆多く、天下に名を知られたる侍國なり、其上御一族の別所殿は、音に聞ゆたる勇將、まつた弓矢御一躰の毛利家は、名垂る十三州の太守にて候へば、信長爭で輕侮せられ得べき

之とは天地雲泥の相違にて、村重は天にも地にも枯野の一本立ち、威勢界分共に微弱に、廣き天下に一人も、我志を酌取るの士なければ、後の殃禍到底も免れ難しと覺悟し、縱令首は刑場に曝さるゝ共、此村重が抑ゆ難き胸中の鬱憤、霽さでは止まじ、此趣兩波多野殿へ、宜敷傳へ給はれ

次に今度上京されたる御名代衆、當國御通過の節、弓矢を望む乎との御尋ね、村重何とて其義に及ぶべき、各々方の御勝手たるべし、當國よりは沿道の者に申付、道筋橋々を掃除致させ、聊か旅の御疲れを劬はり申さん

とて、多くの金銀を出し使者に贈る

嗚呼此一言一句肺肝を搾り、或は愁ふるが如く、其音は籬に唧つ秋の虫に似たり、或は訴ふるが如く、其聲血に啼く杜鵑に似たり、面前に聞く者は腸を絶れぬべし、俠骨稜々たる波多野、何故茲に其本心を打明け、手を握て生死を誓はさりし乎、是れ著者が本史を通じての、大疑問とする所にして、筆を投して兩家の爲めに、熱涙を呑むを禁ずる能はず

丹波の使者は之を斥けて、手切の上は斯る物を受くべき因由なし、と押返したれ共、絶てと云ふに詮方なく、受納めて共々に配分せり、碓井、位田、仁木答へて

人各々面の如く異なる意見あり、匹夫の志も奪ふ可らず、況んや大丈夫に於てを哉、さらば遺憾ながら歸國の節、路筋の御城へ一矢仕るべく候へば、今より其用意あるべし、將軍より檢視をも給はる可ければ、暫時が間尋常に見參致さんと叮嚀に挨拶を了りて別る、君子は交りを絶つ共惡聲を放たず、實に古武士は心床しきものよ

茲に村重が信長に叛きたる、源を尋ぬれば、天正六年十月の事とかよ、村重逆心の趣諸國より注進ありければ、信長が曰く、世の中は兎角浮説多きものぞかし、事實を突止めたる上ならでは、迂濶には信せられず、村重は先年室町殿逆意の時も、無二の軍忠を抽んでたるにより、元來小身たりしも、攝津一箇國を宛行ひたり、微罪あり共之を捨つる事、本意にあらずとて、宮内卿法印、惟任日向守、萬見仙千世に旨を含め、攝津に赴き村重を諭さしむ、十月下旬三人華隈城に入り、詞を盡くして意見したるに、村重も信長の芳情を容れ、我誤てり早速出仕致さんとて、三人を勞して返す

此儘にて魔の魅するなくば、荒木家は太平無事にてありしに、村重の家老共主君の前に集まり、此度世の噂以ての外高し、夫れ衆口は金を溶かし、市に三虎を出すとかや、信長公一旦は赦免せらると雖も、人の口に戸は閉てられず、行先薄氷を踐む心地ぞす、如かず出仕を思ひ止り給へと、左右より袖に縋て搔口説にぞ、花顔柳腰の天女にも、曾て志を奪はれたる事なき、剛腸の村重も、今は家臣が情の羈に

伴されて、心ならずも叛旗をこそは、飜へしにけり

一説に光秀村重が新參を以て、聲望己が上に出づるを嫉み、頻りに蜚語を放ちて村重を陷いれ、村重が家臣の諫めを排し、信長に陳謝せんとして出で行けるに、光秀書を馳せて之を途に止め、信長公の激怒迚も解くべからず、君が此行は自ら求めて虎口に投ずるなりと、茲に於て村重遂に意を決し、伊丹城に據て叛旗を翻ぐことありき

(一〇五) 瓢簞より駒出づ

去る程に碓井、仁木、位田より、眞壁權兵衛、池田平七の両使を、大阪天王寺の砦なる、信長の旗頭佐久間右衛門信盛方に遣はし、此委細を報ず

此合戰は信長の眞意も、波多野の精神を確むる、一の證明方法に過ざれば、丹波勢は一時攻の用意にて取蒐りたるに、見縊る勿れ荒木の腕錆びたりと雖も、武士は武士なり、刀を拔かれて何ぞ背後を見せん、遂に意外の大合戰となり、青野の城、鵤の砦、塚口の砦三ヶ所を陷落するに至れり

元來丹波と攝津とは、代々の怨敵なる上、隣國にて知己緣者も多くて、廉恥の念一入強く、合戰に身を入るゝを常とす、殊に丹波の押に當る者は、皆一癖ある者を選めり、抑も青野城は、過ぐる年波多野より攻落し、燒捨となしたるを、村重未だ信長の與力たる時、信長よりも力を借りて再築し、故青野民部と共に、攝津の両眼と謠はれたる、尾林越後に宗徒の旗頭を添へ、入れ置けり、波多野よりは疾にも攻落して、燒捨てんとの評議もありたれ共、丹後、但馬方面に事繁く、其間に信長、村重充分の手入をなしたるなり

偖て愈々青野城攻擊に事定まり、夜中より押寄たり、大手の大將は澁谷雅樂助秀辰、須知主水景氏にて其勢一千餘騎なり、羽川刑部、額田市正、足立源三郎、波々伯部四郎次郎、新庄藤内左衛門、渡邊大學等、一手〳〵に將たり

二陣は谷田右近秀遠、尾林大膳を大將として、其勢千餘騎なり、安井源左衛門、畑彈正、石堂掃部等、一手〳〵の兵を率ひて備ふ

搦手口の大將は、澁谷播磨守宗忠にて、千餘騎にて向ふ、名和又左衛門、別府五郎左

衛門、安木平内左衛門、佐伯織部、宍戸内記等、一手〳〵に將たり

二陣は平林大膳秀衡を大將となし、其勢五百餘騎なり、仁木權太夫、小山小四郎等、一隊の將となりて備ふ

後詰押の遊軍として、廣澤中務綱忠、酒井佐渡重貞大將となり、二千五百騎を率ひて進む、碓井宮内、位田五郎左衛門、南條新十郎、葦名一學等一隊に將となり、池田、伊丹の兵を押ゆ

以上は孰れも京歸りの兵なり、此次第八上、氷上の館へは、時々刻々に注進せらる、大將軍宗貞は籾井の城まで、馬を進め四方に下知す、天王、虎杖の砦へは、美作守澁谷宗長、伊豆守二階堂秀香を、名代大將として差遣す

宗長は宗徒の旗本備、澁谷掃部、伊田内匠、塩谷、葦名、菊地、佐伯以下千餘騎に、外樣の荒木兵部太輔氏好、赤井次郎左衛門景光、久下、長澤、赤井景遠の名代等の千餘騎を加へ、合せて貳千餘騎と號す

秀香の旗本備は、宗徒の澁谷伯耆、谷田頼母、物集女縫殿助、荒木藤内兵衛等の千餘騎なり、外樣の荒木山城守氏綱、荻野彦六左衛門朝道等の千餘騎を加へ、合せて貳千餘騎と號す

以上は皆圓備にして、小勢たるべしと下知せらる、能勢丹波守久基は、巳の持口たるを以て、能勢右兵衛基冬に五百餘騎を授けて、之に向はしむ、籾井兵庫助敎親、同小六左衛門業光の八百餘騎、大舘主膳氏長の五百餘騎は、池田、伊丹の押に加はる

(一〇六) 青野城陷る

此時寄手は多くの火箭隊を以て、大手搦手両口より、電光の如く火の柱を注ぎ、城中大に苦しむ、やがて大手の櫓は、濛々たる黑煙に包まれ、見る〳〵炎々たる焔の舌は、大厦高樓を嘗め盡し、山の如き火の塊は、物凄き地響を打て落ちたり

澁谷雅樂助、須知主水は力士組に下知して、先手の將新庄藤内左衛門の、城門口備の隊に手を合せ、城門を押倒さんと努めしむ、城門はメリ〳〵音して、あわや破れなんとする氣色を、見て取たる城中の驍將尾林越後は奮然として、大手の城門を押開き、

、五六百騎仁王立となり、寄手を追拂ふ勢ひは、さながら阿修羅王の狂ふに似たり、寄手の稍遲らふ手元に附入り、雅樂助、主水の陣に肉薄し、火花を散らして電擊す

搦手の大將澁谷播磨

時は今なり諸共疾々城門を打破れ

と下知し、搦手門に殺倒す、城中よりも大兵を集めて、茲を先途と防げ共、城門今や危く見ゐたり

此時角櫓に向へる名和貞俊は

伯耆守長俊が末孫、名和又左衛門貞俊、當城の一番乘なり

と聲高々に名乘揚げて突貫す、此牽制連動偉大なる功を奏して、搦手門忽ち破る、澁谷播磨の先陣潮の如き勢ひにて、城中に亂入し、播磨の後陣及び平林大膳の陣は、搦手門外に次第〳〵に陣を固む、搦手門敗軍と聞たる、守將尾林越後は大手口を部下に預け、城中へ取て返すにぞ、得たり賢しと渡邊大學、新庄藤内左衛門等

大手の一番乘り

と連呼し、其虛に乘じて城門を奪はんと競ひ、扉一重を隔てゝ敵味方、必死に鎬を削る

城中の荒木越中、村田因幡、牧左衛門、渡邊勘九郎、吹田式部等最も能く戰ふ、是等は村重の一族にて、攝津侍の歴々なり、寄手は搦手口を碇かり喰止め、城兵討て出ずる事叶はざるにぞ、大將越後下知すらく

今は迚も城を抱へ難し、城兵諸手に岐れては、敵の擒となりぬべし、如かず力を大手の一方に集め、奮鬪して血路を開き、池田、伊丹へ引揚候はん、此越後自ら先鋒に立つべし、諸共いざ續けよ

と一番備の五六百騎、馬首を立直し蹄を揃へて、一鞭高く揚ぐるよと見る間に、黄蘆を蹴立て、澁谷雅樂助の陣を目懸け、槍の襖鐵の楯も何のそのと許り、疾風の如く懸込む

越後の嫡子尾林主膳は、二陣七八百騎にて父の陣後に續き、須知主水の陣へ衝て入る、之より旗頭共五百人三百人と列を作り、雁行に備へて續々と討て出づ

寄手の雅樂助、主水は、斯くこそあるべしと、豫て期したる事なれば、少しも騷がず本陣を遙かに退けて備へ、提筒組、弓組、鎗絡組、楯絡組、大打刀組、と順次に散兵線を張り、珍客御參なれと、手薬揀引てぞ俟ちにける

粉井十郎右衛門光廣、鳳門左近右衛門、鷲尾十郎左衛門、須知伊豫、伏谷源十郎、塔窟文内左衛門、篠山利右衛門

篠山は現時の多紀郡篠山町に居る、後氷上郡黒井八幡山の合戰に加りて戰死、嫡子利兵衛は、德川家康に抱へらる

須知主計等、縱横無盡に駈廻り、一人も剩さず討止めよと、下知して戰ふ

此間に搦手の大將、澁谷播摩宗忠、平林大膳、悉く乘取り、谷田右近、石堂掃部も乘取て大手口を固む、澁谷播磨は、大手の合戰心元なしとて、搦手口より亦張出し、尾林越後の陣を筋違に受け、揉立てんと計りたれば、攝津の旗頭共必死の覺悟を究め、蹈止り〳〵討死す、此間に城將越後は、重圍を脱し伊丹を指して、落ち行くを、雅樂助、主水、播磨の兵叱咤して追ひ縋る

茲に遊軍の大將廣澤中務が手の戰況は、青野附近に丹波軍の放火せる、火の手揚るを見たる攝津軍は、伊丹、池田より後詰として、池田周防、荒木備後、吹田陸奥、荒木新左衛門、同新之亟、同久左衛門、同久六、渡邊勘太夫、同勘七、茨木越中、同兵部、芥川主殿、野村丹後守、伊丹勘右衛門、荒木内匠、同求馬、伊丹勘九郎、中西新十郎、雀部采女等村重の一族、引も切らず馳附く、其前後の総軍二萬餘騎に及び、果然瓢簞より駒顯はれたり

(一〇七) 城將圍を破て遁る

大將中務は、酒井重貞に下知して、

敵は大軍なる上騎兵多し、味方は京歸りの小勢にして、歩兵多し、茲に施すべき謀略あり、急ぎ切所に取上るべし

令を全軍に傳へて、両將切所を取り、千餘騎を分ちて六七箇所に陣を張り、提筒隊、弓隊を前列に備へ、後列に鎗襖を作り、殘りの勢を數箇所に分て伏兵となす

亦加勢として來れる、額田、羽川の陣へ軍使を飛ばし、今に生首を土産として參らすべければ、其塲に伏して戰機を窺ひ候へと傳ふ、此伏隱の指圖は、葦名一學、堀江雲八に依て行はる

丹波軍の陣立了り、鳴を鎭めて俟つ所へ、伊丹、池田より後詰の一番勢、荒木備後、波邊勘太夫等陣頭に立ち、三千餘騎にて押寄來り、中務、佐渡の陣を一文字に、駈け敗らんと競ひ來るを、綾なして伏兵の罠に誘ひ、四方より揑と鬪の聲諸共に、伏兵顯はれて引包み、敵を討取る事數知れず、額田、羽川の陣は案に違はず、生首の大獵なりし

攝津の二番陣荒木主馬、同內匠、芥川主膳、尾林藏人（二代目）、中西新十郎等の千五六百騎、勢ひ込んで駈附たるに、丹波の伏兵意外の所に顯はれたれば、狼狽して陣亂れ討たるゝ者多し、去れど池田、伊丹の後詰は際限もなく打續くにぞ、之に力を得て左右なくは退却せず。

捨つる神あれば拾ふ神あり、丹波軍の能勢右兵衛、澁谷因幡、土屋出雲、荒木但馬、

曾地左兵衛、谷田右近、石堂掃部等、廣澤の加勢として駈附け、入亂れて一人も剩さじと、揉立てければ、攝津の軍遂に崩れ、右往左往に引退く、丹波の軍勝に乘じて、追擊し始めたり

此時後部に當て人馬の騷ぎ烈しく聞ゆ、是なん曩に丹波軍の圍を破り、池田、伊丹を指して逸出したる、尾林越後父子の陣にして跡より、澁谷雅樂助、須知主水は、鹿を逐ふ獵犬の如く、喚き叫んで尾擊し來る

尾林は脫兎の勢ひ凄まじく、遮二無二に伊丹、池田勢に合せんと努め、中務、佐渡は好敵御入來、夫れ網を打て

と許り陣を立直し、兵を放ち攻太鼓を亂打して進ひ、兩軍入亂れて白兵戰となり、攝津の軍討るゝ者頗る多し、其間に大將尾林越後は、隨兵僅かにして鐵馬を躍らし、遂に虎口を脫して、池田軍に合せり

父は生命辛々遁げ延びたれ其憐れむべし、子鹿の主膳は、猛き獵犬に四方を取圍まれ、最早親鹿の跡を慕ふ事の、叶ひ難きを悟るや、今は是迄なりと健氣にも、四五百騎

にて小高き阻に取上り、旗を立て丶敗兵を集む、やがて來り會する者一千餘騎に上りにければ、之にて是非の勝負を決せんと、閑かに兵糧を使ひ休息す、其内に敗兵追々加はり、千四五百騎に及べり、いざ今一戰と陣を立直す

丹波軍の逸雄額田、羽川之を望見し、直ちに馳せて飛蒐るを、大將澁谷雅樂助靜かに之を制し

額田、羽川衆の軍振血氣に侈ぞ、敵は必死の覺悟を究めたる死物狂ひにて候、死物狂の敵を討取る軍立は、左はせぬものぞ、先づ鎭まられ候へ、心の儘に勝負させ候

はん

と云へば新田衆(額田羽川)も陣を立直す、流石老功の貫目あり、雅樂助、主水下知して、二人左右より表裏の陣を立て、一備ぶ丶靜かに進む

此子鹿尾林キ膳は、父越後にもをさ〳〵劣らぬ、剛勇の若大將なれば、今は到底遁れぬ所と、雄々しき決心眉宇に顯はれ、大音にて

尾林主膳只今討死ぞ

と獅子奮迅の勢ひにて斬て蒐るを、丹波軍は會釋して引外し、右よりは搦絡、鎗絡を引懸け、左よりは提筒組弓組をづらりと列べ、悠々と選み討つにぞ、攝津軍算を亂して斃る、丹波軍も死傷頗る多し

村重が宗徒の勇士にては、尾林左門、入江求馬、高安左兵衛、矢尾源八、松本伊賀、和田伊太夫、中川藏人、港左兵衛、若江甚兵衛、三宅玄蕃、十河刑部等の物司共、奮戰して死す

茲に於て暫らく休戰し、攝津軍は小高き塲へ取上り、亦敗兵を集む、其間に丹波軍も陣を立直し、了れば靜かに太鼓を打て進む、主膳は悚へ兼ね、雅樂助の旗本を目懸けて、眞一文字に討て蒐るを、亦輕く引外して狙ひ討にするにぞ、尾林は更に主水の旗本へ懸るを、主水位は茲ぞと中に引包み、乘入れ乘切て尾林の陣を二つに引分け

提筒、弓にて惱ませよ

と旗を打振〳〵下知すれば、額田、羽川、尾林大膳、仁木權太夫、安木平内左衛門、碓井宮内、谷田右近、石堂掃部、太宰齊之助、吉良左門、貝三原小十郎、高七郎次郎

、氷上藏人、荒木藤七等、諸手の陣を入替へ、揉に揉で攻込む程に、主膳の陣四分五裂して討たる

（一〇八）丹波軍尾林主膳に自殺を勸む

大將主膳は亦もや茲を討拔け、高臺に駈上り、雌雄双狐の旗一旒を立て息を繼ぐ、隨兵僅かに百六七十騎に討減され、悠々迫らず陣を立直すを見て、額田、羽川は敵の大將を討漏し候ては、新田の家名を墜し候はん、いざ取蒐りて是非を究め候へと叫んで陣を進むるにぞ、雅樂助、主水より軍使を送りて之を制し

尾林主膳勢蹙まるとは云へ、猶宗徒の勇士百六七十人を從ふ、今一たび最後の血戰をなさば、味方は意外なる損害を招かん、窮鼠猫を嚙むとは正に茲にて候、如かず使者を以て自害を勸め候はん

雅樂助の老臣田井九郎左衛門、佐伯八郎兵衛の、両人を主膳の陣に遣はし、言葉を慇懃にし、諄々として說かしむ

今日の御働前代未聞とこそ覺えて候、當家は源平以來由緒ある弓矢なる事は、兼て御聞及びも候はんが、恐らく天が下に恥かしからずとの存分にて、推參ながら貴所の御弓矢も、他家の夫れの如く輕く存込め候に、時を移さず尋常に御對面を得、實は驚き入て候

御先祖は清和の後胤、瀧口泰政より相傳の御家、中頃は楠家の遺跡を相續せられ候由、今度將軍の前にて、御同姓の尾林大膳が口より承まはりて候、流石に楠の餘流を紹がれたる御嗜みと、頻りに感じ入て候、殊に攝津と丹波とは緣家も多く、斯程迄の苦戰に陷るは本意に候はず、將軍へ合躰の證を立て度許りに、一矢輕く仕るべき本心の所に、慮外にも當家の若者共、粗忽にも荒働に及び、且つは某等が軍立にて御引口をば開きて候に、思込まれたる騎虎の勢ひは、是非なく只今の場合に立到りて候、想へば弓矢の道ほど情無きものは候はず

御父上なる越後殿をば、谷田右近左衛門秀遠が手に、御首を申受て候、其他宗徒の衆何れも、潔き最後と聞く、池田、伊丹の城へも味方の大軍馳向ひ、取切て攻立

て最早落城も、日の内なるべしとの注進にて候、後詰衆も皆追込まれ、又は討死にて候へば、御運も開かれ間敷、今は心閑かに御思案あらせ給へ

若し伊丹、池田へ御引入の望なれば、道筋を開かせ申さん、更に又御最後にても遂げ給ふに於ては、御心安かるべく、味方の陣を引退け申さん、忠義の御家臣衆を故郷へ、遣し送られ度思召も候はゞ、確かに送り入申さん、今は弓矢の禮義是迄にて候、此後は當家より陣を進むる事もある間敷、今日の御働きは末代の日記の上に、特筆して正に傳へ申さん

大將尾林主膳は腕を拱ぬき、聞き了ると共に感極まつて、涙はら〳〵と流し

丹波家御代々の弓矢は、御情深しと兼て聞つるが、今こそ一入に感じ入て候、夫れ嚴霜下り凄風荒みて、百草凋落するの時、菊花獨り傲然として、妍容を衒らひ清香を放つ、寔に君子の名に恥ぢず、父なる越後守基長は、既に討たれたりと承はるからは、よもや御僞りにては有まじ、此上は何の望有てか、生き永らへ候はん、今日の事兼て覺悟致せり

身不肖には候へ共、先祖は清和源氏の流れを傳へ、中葉は楠正行以來の家をも、相續致して候へば、先祖の名を汚す未練の、行ひは致すまじく、殊には將軍御名代の、旗號も見る、亦御家中には緣の一族も、同姓も多く候へば、彼等が手前是非に大將殿に、直接に對面して存分を霽さんと、一途に思込で數度の手合に、及びたれ共武運拙なくて、本意を達せず、是のみは無念にて候

日頃此主膳が胸に秘めたる一念は、縱令天を翔り地を潛る共、貫徹さでは措かじと思込たれ共、仁に向て扱く劍は帶びず、義に向て彎く弓は持たず、御弓矢の御名譽、今こそ初て感じ入て候、主膳が運命は茲に盡き果つ、いざ自害仕らん

今まで苦樂を共にし來りたる、從兵を死出の旅路に、伴ふも不憫なり、弓矢の御情にて古郷へ、歸へし給はらば、生々世々の御芳志と、草葉の蔭にて悅び申さん、さらば愈々御陣を鎭められ給へ

と哀れにも男らしく、挨拶してければ、両使も共に泪を拂ふ、稍ありて田井九郎左衛門は

丹波の弓矢の禮は、之までにて候、只平に御立退あられ候へ、雅樂助秀辰も、此義をこそ申付て候

と云へば、主膳は首を打揮り

御情は言葉に餘りて候へ共、既に居城を乘取られたる上、父の首をも進らせ、宗徒の者まで討せながら、何の面目ありて乎、をめ〳〵と此場を遁れらるべき、今生の名殘に御両使の、芳名を伺ひ申さん

優にやさしく尋ぬれば、田井九郎左衛門對へて

某は源氏にて新田里見の末葉、田井藏人爲宗が後裔にて候

次に佐伯八郎兵衛が曰く

某は藤原氏にて、佐伯八郎仲光が末孫にて候、澁谷雅樂助秀辰の家に、中國より代々事へて候、身不肖なから先祖の家を取失はず、思召もあらば仰付られ候へ

主膳は衷心より滿足の笑を浮べ

誠に御代々の御筋目感じ入て候、源平以來御相傳の、丹波の弓矢の前に尸を横ふる事、武士の本望にて今は、心に殘る事更に候はず

と云ひ終て、腰間の秋水扳放ち、袖を斷て握所を捲き、左より右へ腹に一文字を書け

ば、花の蕾は峰の嵐に破られて、青野が原の空に散りて行く、辭世一首

菊水の流を掬めば濁るまじ、青野が原の夕あらしにも　紅濤

實にや祖先崇敬の一心は、戰場に於て武士の腸を洗ひ、無念無想の境に到らしむ、我日の本の千代萬代に、搖がぬ國の礎は、此一心に依りて築かるゝ哉

(一〇九) 白兵戰

斯くて尾林主膳基重が首をば、羽川刑部氏弘擧げにけり、之を見たる尾林の郎等、箸尾河内、八幡林吉左衛門、伊丹掛兵衛（二代目）尾林靱負等は、主君の跡を慕ふて、同じ枕に就きたるぞ哀れなり、殘る兵士共は雅樂助より、軍使を添へて劬はり、道筋を開かせて送り還へす、波多野家弓矢の風儀とは云ひながら、雅樂助が雅量には人々推服せぬはなし、信長も之を聞て感嘆措かざりとし傳ふ

廣澤中務の陣へ頭を廻らせば、伊丹、池田の後詰勢追掛引掛に馳せ集まり、陣を立直し立直し、大軍にて揉立つると雖も、武略の達人と謠はれたる中務は、千變萬化の秘術を盡くして、攝津の旗頭物司共を討取り、悉く敵を追拂ひ陣を整へ、備を堅くしたる後、諸方の軍心許なしとて、手を分ち加勢を送る、其陣法は柔術合戰と唱へ、大手の陣よりも早く勝負を擧ぐ、其手際の鮮明なるには、孰れも舌を卷きたり

籾井兵庫助敎親と、大館主膳氏長は、池田、伊丹勢押への任務と、山下、多田院の後詰勢押への任務とを、鬮抽きにて、大館は山下、多田院、籾井は池田、伊丹と定まる、兵庫助思へらく

伊丹には大將村重眼張り居れば、必ず討て出ずべし、其上諸方よりの後詰も多かるべく、廣澤の陣は小勢なれば、中に取切て討敗るに非ずんば、前後の後詰勢一所に集まり、大軍にて矢庭に廣澤陣を取圍まん、之のみは心許なし

如かず次第に中にて取切り、あわ善くば池田、伊丹の城まで乘込まん、軍の花は茲なり

と頷づき、其勢八百餘騎、舍弟小六左衛門業光の五百餘騎、國衆の加勢八百餘騎、合せて二千餘騎を率し、池田、伊丹の間なる、河原口、毛間の邊に進み、陣を敷て俟つ、攝津の軍之を望み見て

茲を敵の足溜となせば、伊丹の本城危險なり

とて池田備後、荒木和泉、同丹後等馳せ來り、喚き叫んで討て蒐る、籾井前後左右に駈廻りて渡り合ふ

池田の大將池田筑後守、同周防守、塚口の砦を守る荒木若狭、之を見て茲を敗られては、一大事なりと大軍を押出し、無二無三に斬込む

籾井は膽氣軍略共に、父越中の跡を辱かしめざる、若手の大將なれば少しも騷がず、息をも繼がず鉞よりは、火焔を降らして戰ふ

小六左衛門業光は、入替〳〵陣を立替へ、衝て入る、國衆余田權兵衛、栗栖野忠右衛門、澁谷又七郎、波々伯部右馬助、寺西九郎左衛門、内藤左門、佐用主税助、尾林左衛門、芳賀野四郎左衛門、高橋三郎兵衛等、陣を亂して奮戰する内に、攝津の加勢は

四方八方より、集る事雲霞の如し
先に靑くなりて遁げ出したる、尾林越後は茲にて池田勢に合し、轍鮒の水を得たる如く、俄かに元氣付き
今日の無念を霽すは茲なるぞ、敵は小勢なり一人も生しては還すな、引包んで討取れよ
と大音にて詈しり騷ぐも笑止なり
攝津軍は四方より、七重八重に犇々と丹波軍を取圍み、撞と鬨を作りて攻れ共、籾井は物の數ともせず、大音張上げて八方に下知し
軍を輕くせよ、一所に集るな、前後左右に身を替はして戰へよ
飛鳥の如く駈廻り、虛々實々の懸引をなす內、兵庫助敎親今は五箇の重傷を負ひ、鮮血淋漓として鎧を染むれ共、猶少しも怯まず、敵の荒木右近は聞ゆる剛の者
籾井殿に見參せん
と馬を引寄せむづと組み、型の如く兩馬の間に撞と落ち、右近は荒手の剛力、兵庫助

は綿の如く疲れたる上、五箇所の傷を負ひれば、樊噲の勇も施すに由なく、忽ち右近に組敷れて、危ぶき事風前の燈に似たり
斯くと見たる小六左衛門は、躍り蒐て右近を組伏せたるに、荒木主税助一文字に飛來り、小六左衛門の後より組付く、澁谷又七郎亦顯はれて主税助と組む、之を見て右近の郎等豐島左衛門、櫻井藤左衛門又七郎に討て蒐れば、籾井の郎等長船文之亟國光、高田七郎兵衛吉永、豐島、櫻井に組付く、其光景は猿の川渡乎、腰繫の兒戲乎、實に目醒しき活劇なり
籾井小六左衛門は荒木右近を討ち、澁谷又七郎は荒木主税助を討ち、長船文之亟は豐島左衛門に討たれたるを、籾井の郎等西尾源十郎光村、左衛門を討つ
其他籾井の手へ討取たる首多けれど、其首返して籾井才右衛門光政、八田金七敎義、峠小次郎業勝、高田七郎兵衛吉永を討たる、籾井才右衛門は、下村九兵衛を討取たるが、三宅權左衛門と組んで討たる、高田七郎兵衛は、神南佐兵衛を討取たるが、藤田藤四郎に討たる、八田金七は大力にて、多くの敵を討取りて甑廻り、最後に池田筑後

守を討たるに、池田の郎等大勢にて蒐り合ひ、遂に討たる、三草吉左衛門敏繁、峠小次郎業勝は、池田筑後が旗本へ討入り、多くの首を得たれ共、多勢と渡合て討死す、之ぞ眞の白兵戰なり

(二〇) 酒井重貞の末孫

兵庫助敎親は陣を立替へ入替へ、大軍の中へ討て入れば、敵陣稍色めき亘る、此時澁谷播磨宗忠は、籾井の陣心許なしとて、來りて之を見るや、素破こそと千餘騎を三陣に分ち、面も振らず一陣を乱し掛け、宗忠靜かに太鼓を打て蒐れば、後陣の平林大膳秀衡も、五百餘騎を二陣に分ち、敵の後陣へ討て入るにぞ、攝津軍益々動搖めく、兵庫助は

位は茲ぞ揉やもめよ

と下知し、遮二無二に先陣を進ませ、跡より太鼓を打ち、曳々聲して蒐れば、攝津の軍遂に崩れ立ち、池田、伊丹へ引取らんと、散々破亂〳〵になる

茲に於て籾井等諸手の陣を整ゐ、追擊に移らんとて、靜かに陣を進むる所へ、諸方にて敗北したる攝津の、荒木丹後、同備後、芥川主殿、尾林藏人、吹田陸奥、野村丹後、伊丹後兵庫助、三宅能登、荒木久左衛門、同主膳、茨木越中、伊丹勘右衛門、同安太夫、同勘左衛門、荒木新之烝等、敗軍を集め無念の牙を嚙鳴らし、一所に固まりて籾井の陣を睨み、一揉にもみ崩さんと評議を凝らし、池田方面を指して奔れる、敗軍共を引戻し來りて、大軍となる

総大將宗長、秀香より、中務、雅樂助、須知、酒井の陣へ軍使を遣はし

何とて左樣に深入する乎、若手の衆が楚忽より、事茲に及びたるなれ、只手早く陣を引揚くべし

稍怒氣を含んで下知を傳へ、猶も心懸りなりとて、両將馬を進めて、諸陣を巡視す

因に二階堂伊豆守秀香と、酒井佐渡守重貞との關係を記るさんに、秀香は秀治の實弟にあらず、實は酒井重貞の次男なり、秀治請ふて義弟となし、二階堂の家を嗣がしむ、秀治秀尙亡びて後、秀香高城を死守し、先業を恢復せんと謀る、今秀香の感

狀を掲げん

多紀郡南庄小多田村
（小嶋）專治家藏

本目於二神尾之會一、秀治之最後見届、辞世之一首を預り、進士作右衛門之尉を討取、戰功無並働、尤以忠節候、我於開運者、一郡之可任城主也、謹言

六月二日　秀香花押

小嶋次郎四郎殿

是は天正七年の事なり、小嶋家には此外に、秀香が戰場にて着用せし、簑を藏すと云ふ、秀香も此年戰死す、享年二十歳

酒井重貞は、多紀郡油井の城主にして、重貞の三男彦右衛門の子孫は、今油井、草野、古市等の諸村に殘れり、其家藏の系圖に依れば、酒井氏は波多野刑部亟義定より出づ、義定の子を三郎康朝と云ひ、從五位下左衛門尉を以て、承久三年二月八日、三十八歳にて戰死す、其子孫太郎康重、相州大住郡酒井邑に住し、酒井氏と稱し定紋は左三巴を用ゆ、康重の子太郎左衛門康昌、弘安七年五月十八日、六波羅に病死す時に六十一歳、其子三郎太郎重根、延慶二年七月二十日五十八歳にして死す、其子次郎左衛門康盛、元弘三年五月六波羅滅亡の時討死す、其子三郎兵衛康昭鎌倉を避て他國に往く、其子三郎左衛門康勝、六十四歳にて死す、其子孫太郎勝重五十七歳にて沒す、其子左衛門康忠五十八歳にて死す、其子中務亟重基、三十五歳にて死す、其子刑部丞重益、重益の子六郎左衛門康實、應仁の乱に功あり、其子中務亟康重丹波に住し、波多野氏に從ふて數次戰功あり、同國多紀郡油井の城主となる、其子佐渡守重貞天正の亂に軍功あり、波多野の七組の一人となる、其嫡子上野介氏盛後秀正と改め、天正十六年三月二十八日死す高仙寺に位牌あり、二男は即ち秀香にして、三男を彦右衛門と云ふ

秀治の書翰　矢代村德右衛門家藏

酒井矢代両宮に、壹反如二先々定一、寄進可レ爲、御藏可レ有レ之　謹言

天正四年十月三日　秀治花押

以上

酒井谷之内、爲二免許遣一、可レ得二其意一者也

天正四年十月十一日　　四郎右衛門
　　五郎左衛門

秀治花押
矢代
五郎さへもん
矢代
四郎ゑもん

波多野元秀の感狀

今度家中不レ慢、附而無二別心一、宮田入城御忠良候條、村雲内奥山名々に合力、但諸公事本役、如二先々一、可有之其沙汰候、猶酒右可レ被レ申候恐々謹言

弘治三年九月二十七日

酒井三郎四郎殿　人々

孫四郎元秀花押

(二二) 高橋綱包の子孫

宗長は此有樣を見て、素破こそと、下知して諸陣を調ぶ、山下多田院の陣も心許なしとて、澁谷播磨の千餘騎、平林大膳の五百餘騎に、國衆を加へ合せて、二千餘騎をして赴き援けしむ

籾井兵庫助は、數箇所の疵を負ひたるを以て、舍弟小六左衛門を、名代たらしめんとしたれ共、剛毅の兵庫助諾わず

是式の手疵何程の事も候はず、御先を賜はりてこそ面目あり、敵は幾萬あり共御心安かれ、向ふ所を討破り申さん

凜々しく答へ、兄弟の勢千三百餘騎を、三陣に分ち、先鋒となりて進む、二番陣は能勢右兵衛基冬の、五百餘騎なり、其次は國衆の加勢千餘騎なり、遙か脇には荒木兵部太輔氏好の、五百餘騎、其次に赤井次郎左衛門景光、久下、長澤が名代の八百餘騎、其後へ大將宗長の陣二千餘騎にて扣へ、廣澤中務、酒井佐渡も締りの塲を開き、此所

へ出て陣を張る

攝津軍は一所に集りて雲霞の如し、此戰ひは老功の荒木氏好、赤井景光も加はり居れば、一段の見物にてありし、宗長靜かに褒々として太鼓を打てば、先陣の籾井兵庫助一陣を亂して、荒木周防、同和泉守か陣に懸入り、大呼して切込み、敵の稍色めき立つるを見て、二陣三陣を縱ち揉立てければ、周防、和泉は陣を敗られ退くにぞ、荒木備後、同丹後憤激して、籾井の旗下へ衝て入る、能勢右兵衛基冬、横合より備後、丹後を衝て蒐れば、周防、和泉又陣を立直し、能勢の陣へ討込むを、丹波の三草左京、內藤五郎兵衛、余田權兵衛、栗栖野忠右衛門、高橋三郎兵衛綱包等

綱包の先祖は、應仁の頃山名氏に屬し、後波多野氏に從ふ、波多野氏も應仁の亂に、山名持豐の軍に從ひ、因幡の八上より上京し、是より後丹波に入りたりと云ふ、綱包は天正七年秀治に從ひ、船井郡神尾山に戰死す、其子孫兵衛之綱時に年十歲、從者扶けて他鄕に走る、間もなく當の敵光秀滅びたるを以て、多紀郡小野原、鷲尾、畑に移り、後慶長三年向井村の舊栖に還り、子孫に遺訓して、出仕を絕念し農に歸

せしむ、其主從の子孫今猶多紀郡向井村に榮ゆ

大音にて名乘かけ、前後に切て廻る、攝津軍の稍浮足となるを見て、荒木氏好靜かに陣を進め、敵を横合に望んで取切らんと、陣を脇へ詰むれば、攝津軍崩れて退く

野村丹後、吹田陸奥、芥川主殿、伊丹兵庫等、脇より進んで敗兵を盛返さんと努むるを、赤井景光先陣二陣を放ちて、伊丹、芥川、野村、吹田の陣へ手痛く討込み、攝津軍大崩となる

茨木兵部、尾林藏人、伊丹源內、荒木久左衛門、同新之烝、三宅能登、伊丹安太夫、同勘左衛門、渡邊勘太夫等は、敗軍を遣り過し置き、丹波軍の陣々へ横合より討て入り、頽勢を挽回せんとす、大將宗長

一あて輕く當てよ

と下知すれば、旗本勢縱横に駈廻り、敵陣を崩す、大厦の將さに傾むかんとするや、一木の能く支ゆべきに非ず、攝津軍は再三再四陣を立直さんと、試みたれ共叶はず、ひた崩れに崩れたり、籾井は一陣づゝ亂して、追討せんとするを、氏好は無用なりと

て之を制し、陣を堅む、諸將此機に乘じ、池田城を乘落さんとの、評議出てたれ共、中務、氏好之を押止めて

唯々早く陣を引揚げくる事肝要なり

と主張し、宗長尤なりとて、退軍の令を下す、秀香の陣へも軍使を送り、此旨を通ず

此日の合戰は、村重も油斷して居たるに、諸城より出したる後詰共、多く討たれたりとの注進に、こは無念なりとて、自身出馬し、華隈の志摩守、茨木越後も討て出でたるに、丹波勢は天王、青野、小柴、黑川、吉川、横地の邊に陣を整へ、備を固め居れるを以て、齒噛をなして途中より、軍を引返せり

山下多田院方面も、色々の花軍などありたり、戰ひ終りて丹波軍は、能勢、天王、虎杖の諸城へ引入れ、兵糧を集め、砦を修築し、在番の人數を增し、虎口を丈夫にして、兵を國へ引返す

(二三) 攝津軍の戰死者

討取たる攝津軍の旗頭物司には、尾林主膳基長を初めとし、塚口の城主荒木若狹守定村を、荻野彥六左衛門討つ

荻野の城址は、氷上郡葛野村の內下新庄村に在り、先祖定朝は尊氏に仕へて軍功あり、丸に二つ引の定紋を給ふ、天正七年光秀の軍柏原に迫り、放火して圓通寺迄來る、荻野喜左衛門早馬にて駈付、石生村の十六町と云ふ所にて、光秀に會し、圓通寺は我旦那寺にして、疑はしき者は彼寺に居らず、願くば兵燹に罹らざらしめよと請ひ、巨刹圓通寺は爲めに無事なるを得たりと云ふ、荻野の子孫は今下新庄、成松等に存在す

若狹は勇將にして、荻野を大將分と認め

塚口の大將定村なり、尋常に名乘て勝負せよ

と叫んで迫り、荻野と組む、荻野も大力なるが良久しく揉合ひたる後、遂に討取たり

、伊丹後兵庫を、廣澤中務綱忠討つ、尾林後藏人を、吉川軍次左衛門討つ、荒木周防を、宗長の本備衣笠十郎次郎討つ、三宅能登を、仝穗田刑部討つ、茨木越中を、仝葦名帶刀討つ、芥川主殿を、仝富士名左衛門討つ、山下靱負助を、赤井の老臣穗壺宗運入道討つ、渡邊勘九郎を、矢尾七郎兵衛討つ、荒木越中を、須知主計討つ、渡邊勘七を、金城寺喜六討つ、伊丹主水を、葦名一學討つ、高津右衛門八を、緒方平次郎討つ、十河式部を、新庄藤内左衛門討つ、荒木彌藏を、碓井宮内討つ、明石佐右衛門を、貝三原小十郎討つ、平野玄蕃を、太宰齊之助討つ、志貴兵右衛門を、十六歳の規矩千代松討つ、犬飼五郎兵衛を、十四歳の吉良左門討つ、犬飼は剛の者にして、高七郎次郎と鎗を交ゆるを、小僧の左門背後より、犬飼の胴中を突き、怯む所を七郎次郎取て押へ、小僧に首を擧げしむ、當時丹波軍の士氣如何に旺盛なりし乎を、察するに餘りあり

山下源五を、一井藏人討つ、桂川源太左衛門を、鳥山内藏助討つ、荒木小大膳を、櫛田豊前討つ、宅間大内藏を、八幡の祝部脇藏討つ、宅間は光村の老臣にして、剛力の

者なり、若江長門を、日下部後石見討つ、高規内記を、澁谷伯耆討つ、國府次郎右衛門を、余田權兵衛討つ、野村大學を、黑川左門討つ、吹田陸奥を、長澤内記遠忠討つ、久寶寺太郎左衛門を、久下の郎等荻原平四郎討つ、荒木主膳を、赤井景光討つ、茨木兵部を、赤井の郎等中村源太左衛門討つ、星野大膳を、小林采女討つ伊丹勘右衛門を、荒木氏好の郎等早川左内討つ、伊丹安兵衛を、大路十郎兵衛討つ、牧佐左衛門を、箕浦平六兵衛討つ、荒木主馬を、籾井が手の籾井源次郎敎祐討つ、峰方兵衛を、仝八田八九郎友光討つ、小野原勝藏を、仝西尾六郎左衛門光義討つ、高規七郎兵衛を、仝蓮池八郎左衛門討つ

此他池田筑後、荒木右近、神南佐左衛門、下村九兵衛等の、大將物司の首を、多數籾井の手に收めたり

進藤求馬は、葦田四郎左衛門と鎗を交へたるに、進藤の名を聞て葦田は、鎗を捨てムヅと組む、進藤方の更科數馬、脇より葦田に組付たるを、取て押へたる所へ葦田の郎等飛來る、葦名は兩人に

名乗り給へ、伊丹の城まで送り入申さん、某は芦田四郎左衛門爲助と申せり

と云へば

公方家へ仕へたる、進藤大和守が孫にて、進藤求馬と申して候

某は信州の住人、更科五郎の子にして、由緒ある侍にて候へ共、故在て流浪し、今は荒木村重の客人、更科數馬と申して候

葦田は思ひ當る所ありて、打ち頷づき

我父公方家へ訟訴事ありて、滯京の砌、進藤殿の御親父より、何呉となく親切に力を添へられたりと、聞きたれば、御同姓の懐かしさに、若しやと心に懸り、御名前を伺ひたるに、扨ては矢張其御子息にて在せしか、若き身空にて定めし大望も、懐かるゝなるべし、疾々立去り給へと情を含めて勸むれど、進藤、更科は之を斥ぞけて

弓矢の御情は言葉に餘りて、嬉しくは候へ共、此深疵にては迚も、生命を取止め難し、御芳志は草場の蔭よりも、忘れ申さず候

葦田は猶も情ある言葉を重ねて、さらば肩に掛けてなりと、背に負ひてなりとも、送り届け申さんと云ふを、進藤は肯がはず

此上の御情に、古郷にある老母妹に、名殘の一筆を傳へ給はれ

とて矢立取出し、一札を認めて渡し、心閑かに自害す、葦田涙を揮ふて首を擧げ、事の次第を老母に通じ、歸國の後も其菩提を弔ふ

此芦田爲助の墓は、天田郡土師村、天神の東に在り、碑名に、夏雲凉天居士と刻む、爲助親に事へて至孝なりしかば、後福知山の藩主松平忠房、孔文院林某に命じて、孝子傳を作らしめ、之を表彰す、其子孫今に存して、此傳記を家藏す

(二三) 村上義光の末孫

村上彦三郎と云ふ十八歳の若武者は、攝津の荒木修理を組伏せたるに、修理の兄荒木新介、弟を助け村上に組付たるを、又取て押へ組敷たるに、荒木の郎等落重なりて蒐る、之を見て村上の郎等共駈付、荒木の郎等と格闘す、村上二人を押へながら

身不肖なれ共、元弘の初大塔宮の御身代に立ちたる、彦四郎義光の末孫、村上彦三郎義淵と申す者なり、若年には候へ共、丹波の弓矢の意知をば、少しく嗜んで候、只今の御働き神妙にて、嘸名ある御方と察し、卒爾に御首は申受間敷候、名乘り給へ道筋を開き、送り届け申さん

とて、大勢掛る味方を制してければ

某は荒木新介重長と申し、是なる舍弟は修理進正村と申て候、攝津守村重が甥に當り、正村は村重の子分にて候、今日の大將分の内なれば、首に御不足はなからん、弓矢の御情は、生々世々忘れ申さず候、只少しも早を首を討たれよ、名ある村上殿の手に掛るこそ、本望にて候

村上は、左は曰はず、平に立退給へと、强ゆれ共聞入れず

村上然らば御兄弟の内一人、重疵を負ひ給ふ方、御自害あらせ給へ

荒兄弟共に手疵重く候へば、此上の御芳志に、最後を尋常に給はれ

村上も哀を催して涙を流し

然らは已むを得じ、心閑かに御自害あられよ、遺し置るゝ言もあらば、仰せ付られ候へ

荒別に遺し置く言も候はねど、此場の光景を、御序もあらば妻子共迄、傳へ給はれ村上殿賴み申す

と、之を此世の名殘りに潔く、兄弟枕を並べ、自害して果たり、從者の内供腹切るもあり、村上約束の如く、妻子の許へ此趣きを具に報じ、歸國の後ねんごろに菩提を弔ふ、人生情の極致に遭遇すれば、菩提心を發する、獨り熊谷蓮如のみに非ずかし信長も之を聞きて、丹波の弓矢は一風變りて、氣高き武邊の意知合哉、誠の武士は左こそありたきものなりとて、襟を正して感嘆したりと聞ゆ

元來波多野家は、弓矢の意知を重んじ、少年に至るまで、弓矢の詮議嚴重にして、他國にて野武士雜人の武邊と、名ある武士の武邊と、其間に何等の區別なきとは、仝日の談に非ず、茲に澁谷雅樂助秀辰の旗下に、赤間九郎太郎と云ふ少年あり、大館方の里見平左衛門が、尾林左門を討取たるに、脇より高山左衛門顯はれ、里見を斬て尾林

の仇を取る、丹波の大澤玄蕃亦顯はれ、高山は首返しに討たる、之れを見て攝津の松本伊賀、入江求馬の兩人、高山の仇思ひ知れよと、亦もや大澤に討て蒐る

大澤は二人を相手に取り、火花を散らける所へ

赤間九郎太郎貞光、生年十六歳、一人は受取申さん

とて、入江求馬に斬て蒐る、赤間以外の三人は、度々の戰ひに身体綿の如く疲れ、手疵も多くして、働き自由ならず、生命取遣の瀬戸際なるに、呑氣にも入江は

餘り疲れたれば、暫らく休息しては如何に敵の衆

と圖れば、大澤玄蕃忽ち賛成し

御尤にて候、まづ〳〵一服致さん

斯くて休戰條約は、無造作に成立ち、飽まで氣樂なる敵味方は、面と向て踞み込み、互に腕前を譽合ひ、松本、入江は赤間の働きを感じ

若年に似ず神妙にて、末頼母敷覺ゑ候、我等は手疵に惱やみ、茲にて最後を止め、若武者に首を得さするぞ、菩提を弔ふて給はれ

と頼込めば、赤間は

畏つて候、遺し置るゝ言も候へば、承まはり申さん、御筋目を名乘り給へ

優しく云はれて、兩人は最も滿足の笑を浮べ

松本伊賀、入江求馬と云ふて、尾林大膳に尋ねられよ、大膳は我等が素姓を詳しく知りて候

と云ひ終りて自害し、二人共に首を赤間に授く、赤間は郎等を麾ねき、大澤玄蕃を負はせ、入江、松本を初め、里見、尾林、高山と、五級の首を叮嚀に收めて、郎等に持たせ、陣所に歸りて有し次第を、逐一物語れば、澁谷雅樂助、須知主水も口を極めて褒めそやし

弓矢の禮義にて候、赤間に大澤を看護せしめん

とて、青野の城へ送らしむ、松本、入江は侍司の内にても、名ある剛の者なり、信長の名代も聞て驚嘆し、前代未聞の義擧と譽め、早速此趣きを、信長へ注進したるに信長も

夫れが十六歳の子供の仕事なる乎

とて、丹波の弓矢には、奥深き根抵あるを、今更らの如く畏敬せり

是より赤間の名は、兩軍の間に靡然として高まり、武士の花よ、蕾よと謠はれたり、

大澤は重傷にて、其夜終に瞑目せり

(二四) 丹波軍尾林主膳の遺骸を送還す

此他に少年輩の、功名を立たる談話、殊勝なる意知など多くあり、味方の死傷も意外に多く、信長の撿使も、丹波軍の手痛き戰ひ振りを見て、膽を冷やして舌を卷き

源平以來の弓矢と、高言吐かるゝも道理なり、今こそ思ひ知りて候、弓矢の意知は世間に肩を並ぶる者有間敷候

とて委細を目錄に載せ、注進してければ、信長大に感喜して、感狀を給はりたる者多し、かくて軍勢を順次國へ引入れ、宗長、秀香は跡仕置の、下知をなして歸國す

澁谷雅樂助は、須知主水に命じて、尾林主膳の遺骸を、古郷へ送らしめたるに、父の

越後及び攝津の旗頭共、之を見て、丹波衆の弓矢の嗜みは、情籠れりとて、感涙を浮べぬ、其遺骸に添へて送りたる書翰あり

愼而告二傷於基長一候、抑當家之軍勢、前夜靑野之城陷候前後、貴將武勇之程感入候、御嫡子基重相續而、無二比類一御最後、十二箇度之粉骨、士卒一同之義心、將軍御名代、奉レ始、當家之者共、名譽之稱嘆仕事に候、秀辰、景氏、感慨之餘、馳二軍使一、進二自害一之處に候、御印江田大館之一族、羽川額田之者、申受畢、御死骸並遺物之品、今所レ授レ之候、風令二承聞一候、基重、賴光五代之後胤、從二瀧口右馬允泰政一以來、代々爲二御弓矢取一之條、今更所レ令二至極一候、弓箭之禮、如レ斯

謹言

二月二十三日

謹上

尾林越後守殿

澁谷雅樂介秀辰

須知主水　景氏

旋て禮使の一行歸着すれば、大將軍宗貞以下、國中の旗頭老臣共、八上の館に集まり、信長へ使したる結果如何にと、膝を繰り片唾を呑んで詰掛く

廣澤中務、澁谷雅樂介、須知主水、酒井佐渡、澁谷播磨等、文武兼備の良將共、腕に撚を掛け、肝膽を碎きて、樽俎の間に折衝したる事なれば、武略も十二分に調ひ、殘る隈なき上首尾にて、當家の如く、天晴名將の揃ひたる家は、世上に儻ある間敷、他國にては荒働の男を、弓矢の祖師と崇め、合戰の作法も、武略も知らざるが多くて、丹波の軍立を見ては、神變不思議と云ひ、之を聞く者は、誇大に失すとて、信せざる程なり、著者も始めは然く疑ひし

かくて諸城砦の手入、兵粮の手當など、種々の下知あり、此上は波多野家の武運に任せ、萬事を抛ち、數代の志願を、一時に立つるあるのみと、人々勇みをなせり、代々名將の績きたる家にて、積善の惠み深ければ、其餘慶今に開くべき事、疑ひあるべからずとの、强き〳〵信念は、丹波人の胸中に滿ち遍れり

只返す〳〵も心に懸るは、毛利家の手筈何となく、曖昧にして、譬へば船を冲へ出し

たる漁師が、天外を仰ぎて、頻りに風向を氣にするが如く、男らしからぬ仕打と、つぶやく者もあり、小野木、谷を、武士の風上に置けぬ、未練男と罵しる者もあり

大將軍宗貞は、青野合戰の摸樣を、仔細に聽取り、御機嫌頗る斜にて

信長の希望に依り、青野一城を陷いれ、城兵共を追捨にして、輕く引揚くる武略を授けたるに、若者共の楚忽より、大事を扣へたる身を忘れ、無用の犧牲を拂ひたる

こそ、返す〳〵も遺憾なり

と爪、諸將に大目玉を喰はす、骨折て叱らるゝ者、豈夫れ傘屋の小僧のみならん哉

此合戰初の間は、左程でもなかりしに、攝津軍は素より丹波軍の、本心を知る由もなければ、只管最後を究めて、强く働くにぞ、丹波の若者共之に氣を持ちて、必死となり、中務、雅樂介、主水、佐渡よりは、頻りに軍使を飛ばして、輕く〳〵と制したれ共、羽川、額田、尾林大膳は、城將越後を討漏らしたるを、殘念がり、せめて尾林主膳を討取らんと、夢中になりて、兵を引揚げず、其間に池田、伊丹、山下、多田院、塚口等の後詰、馳集まり來り、廣澤、籾井の陣へ掛り合ひ、遂に引揚の機を逸したり

、此江田、大館に屬する、綾部、高仙寺の新田黨は、何時も血氣に逸り、戰機を愆まれり

宗長、秀香陣を進め、漸く退軍するを得たるは、せめてもの幸ひなりし

此合戰は、彼我の兵力略匹敵し、丹波軍は巧妙なる軍略にて、敵の旗頭共を、思の儘に討取たれ共、元來が眞意を包める、方便の武略なれば、諸士が鼻高々と、持出たしる功名談は、却て宗貞が、叱言の種となりたるは是非もなし

何時もながら、大將軍なき合戰は、何處となく浮色立ち、折角の武略も、十分奥意に落ちずとは、諸將の一致せる批評なりし

之も丹波の弓矢ならばこそ、寄合大將にても、斯程まで同心協力して、戰ひ得たるなれ、之皆平素の訓練に依るものにて、他國にては我意邪慢の、角突合にて、一致する事なしと傳へらる

丹波にては、下士卒の末に至るまで、弓矢の上に、我慢と云ふ事を知らず、幾萬の大軍も主腦なきに、手足の如く一致協力して全軍の振合に意を注き、抜駈の手柄を貪るが如き事、曾てなし

偖て攝津合戰の次第を、早速使者を以て、信長、秀吉へ報じたるに、共に大儀なりとて、音物の附屆などあり、殊に秀吉は丹波の弓矢の意知に、非常に感動したり、別所とは双方より、切々使者を往復し、毛利へは別所より、再々戰況を通じたるに、毛利家の手筈兎角心細しとて、忍の使者來れり、是よりは愈々攝津へ、出軍の準備に忙はしく、八上、氣上の兩館にて、日々評議を凝らせり

八田、矢織、能勢、天王、三草、三田、其他諸城砦の手配、八上、氣上兩本城の兵粮の蓄積など、國中に下知して、殘る隈なく調へ、天下に旗を揚げ、多年の宿望を達する、時節は目の前に來れりと、國中上下共に奮躍して俟てり

丹波戰史波多野盛衰記第四卷終

82
711

明治四十五年三月十二日印刷
同　四十五年三月十八日發行

第四卷

定價金拾五錢

不許複製

著作兼發行者　東京市京橋區南小田原町三丁目七番地　高田彰

印刷者　兵庫縣多紀郡篠山町ノ内東新町八十七番地　代表者　萩原林三郎

印刷所　兵庫縣多紀郡篠山町ノ内東新町八十七番地　篠山印刷合資會社

發行所　東京市京橋區南小田原町三丁目七番地　東京戰史館　振替口座東京六九八六番

落